

はじめに

医療従事者になるためには、必修科目「臨地実習(臨床実習)」の履修を避けて通ることはできません。本書は医療従事者のなかで看護師を目指す方を対象にしています。

臨地実習で受け持つ対象は患者さんです。患者さんは何らかの病気をかかえて受診し、外来で検査後入院となります。多くの患者さんは、体調がすぐれないなか気分は落ち込み、とても不安な気持ちでいると思います。

そのような状態で入院してきた患者さんを受け持ちケアを行い、できる限り患者さんが治療に対し前向きになれるように、患者さんの気持ちを察しながら、学校で学んだ知識・技術を駆使して退院に向けてケアする…この実践について学ぶことが臨地実習の目的です。

学生時代は自分のことすら十分に理解できず日々悩み、解決できないこともあり悶々^{もんもん}とするときがあるかと思います。しかし、患者さんの前では「明るく優しいまなざし」であることが求められます。学生さんには「そんなの無理に決まっているじゃない!」と反発されてしまうかもしれません。しかし、臨地実習が始まれば、悩みをかかえながらも患者さんに悟られないよう、ふるまうことでしょう。

そのような気持ちをかかえながら、患者さんのケアに精神を集中させ、昨日と今日の様子の変化も見落とさないよう臨地実習を続けるなかで、たとえば患者さんと次のような会話を交わしたとします。

学生さん「昨日よりも今日は少し楽になったようにお見受けしますが、いかがですか?」

患者さん「よくわかりますね。本当に今日はとても楽なんです!」

すると、学生さんのこれまで落ち込んでいた気持ちも楽になり、悩みも少し和らいでゆくように感じられるのではないのでしょうか。

つまり、われわれ人間は、人との交流をとおして相互に良好な信頼関係を築くことができれば、悩みが解消されたり軽減されたりする可能性があるということです。このような経験を積み重ねながら、人とのかかわりが本当に大切であることを実感できるのが臨地実習です。

各領域の実習では、それぞれ年齢・性別・病名がまったく異なる患者さんを受け持ちます。臨地実習では、医療従事者を目指す学生以外は経験できないことを経験でき、各領域の実習では楽しいことや苦しいことなども多々あるでしょう。臨地実習を終えて卒業する頃には、たくさんの経験をして大きく成長した学生さんたちの姿を目にします。一人ひとりの学生さんが自分が受け持った患者さんから何らかの影響を受けながら、人生の縮図を垣間見ることを通して学習できたのだと感じています。

初めての臨地実習にあたり、「どのようなことを臨地実習で学ぶのか、また、何に注意し、どのような態度で臨むべきか」をこの本では紐解いていきます。学生さんのみなさんを日頃から見ていて、著者が最も大切であると思っていることを第1章から第3章までページを割いて解説しています。現在の看護学の授業科目では不足していると思われる内容を「著者の親心」から章ごとにまとめて記しました。各章の内容は次のとおりです。

第1章 相手を知るための自己のパフォーマンス

第2章 人の行動の表現方法

第3章 人を観察するときの基本

第4章 患者さんが入院する病院・病棟の看護体制

第5章 世界保健機関(WHO)・国際疾病分類(ICD)・看護診断(NANDA)

第6章 患者さんの情報収集・観察・インタビュー

第7章 患者さんの問題点の考え方、表現方法、記載方法

健康上の問題を抱えている方を対象に、その人が今一番必要としていることを援助する医療従事者が看護師です。的確な援助を行うためには、患者さんの様子・しぐさ・話し方・表情などを直観的に判断しなくてはなりません。そのような判断は決して簡単なことではないことを常に心に留めながら、臨地実習に臨んでください。

本書の編集・発行にあたり、株式会社 Gakken 取締役の小袋朋子氏、根気よく毎回の打ち合わせに時間を割いてくださいました編集担当の森 友紀氏には的確な助言をいただき完成しましたことを感謝いたします。

2024年9月
古橋 洋子